138　No.18: 伝統工芸品 巡回展－本県の手仕事 実演ＰＲ－
（平成 31 年 3 月 26 日）

【巡回展「手仕事のかたち―伝統と手わざ―」の様子】

天明鋳物とは、下野国佐野天明（現栃木県佐野市）で作られる鋳物のことで、栃木県を代表する工芸品の一つである。始まりは７８１年と言われ、現在も作られている中で日本最古の歴史を持つ。千利休をはじめ豊臣秀吉や徳川家康も天明釜を愛用していた。

今回、鋳物師である江田蕙（えだ　けい）氏が来港し、３日にワークショップを行った。会場は香港中央図書館。在香港日本総領事館と国際交流基金が主催する巡回展「手仕事のかたち－伝統と手わざ－」のメインイベントだ。

巡回展は、日々の暮らしの中で育まれてきた日本各地の伝統工芸品約１００点を世界各地で展示、紹介するもので、中国においては昨年５月の北京で始まり、香港が８か所目。この後は海を渡り、北米各地で展示される予定である。

今月２日のオープニングセレモニーでは三味線演奏の後、陶芸愛好家ジェシカ・ウォン氏が益子焼などを紹介した。自身の体験を交えながら、生活に役立つことや「用の美」を追求する益子焼の素朴さ、ぬくもりを説明した。

その後、江田氏が天明鋳物について①日本刀と同じ製鉄法の「たたら製鉄」で作られる釜は耐久性に優れていること②この釜で入れたお茶には釜の鉄分が溶け出し、一段とまろやかな味わいを楽しめること③型から作り始め、完成まで３か月以上かかる手の込んだ逸品であること―などと説明した。

翌日のワークショップでは、６０人の参加者を前にさまざまな金工を紹介。実用的でありながら美を兼ね備えた作品の数々に皆夢中でシャッターを切っていた。実際の製作過程の説明を聞き、大量生産とは違った丁寧かつ根気強い「手仕事」を目の当たりにし、仕事ぶりに感嘆していた。会場の熱気がピークになったのは江田氏の実演のときだ。溶かした錫を型に入れ、作品を作って見せたのだが、テーブルの前後左右はもとより江田氏の背中越しにのぞき込む人もいて、貴重な経験を逃すまいという様子がひしひしと伝わってきた。

栃木県には天明鋳物や益子焼のほかにも、結城紬、日光彫といった美しい工芸品が多数存在する。こうした貴重な「手仕事」を将来に残していくためにも、香港での販路開拓に尽力していきたい。香港には、その価値を理解してくれる人が数多くいるのだから。

毛塚　隆弘(けづか　たかひろ)
栃木県香港事務所所長。
1993 年県庁入庁。産業政策課、国際課などを経て日本貿易振興機構（ジェトロ）に出向。2017 年 4 月から現職。栃木市出身。